

## D. F. Krill による実存主義ソーシャルワークにおける存在の意味の追究

田嶋 英行\*

Krill による実存主義ソーシャルワークは、「疎外」に悩むクライアントを援助するために展開された援助枠組みである。彼はその焦点を、クライアントが自らの存在する意味を把握することができず、自己が不安定な状態にあることに当てた。まずはクライアントが、「実存」として存在していることに注目し、同時に「世界＝内＝存在」として存在するものとして捉えたのであった。ただしその「世界」は、「共世界」として規定されるのであり、「そのつどすでにつねに、私が他者たちと共に分かちあっている」。つまりわれわれは、他者とともに「世界」すなわち「コンテキスト」を共有しているのであり、「他者たちに隷属している」。したがってわれわれは、かりに独自で固有な本来的な自己を生きていると思っけていても、じつはそれは、すでに自身を取り巻く他者によって規定されている自己を生きているに過ぎないのであり、ただたんに他者に隷属しているに過ぎない、のである。この援助枠組みは、クライアントが「疎外」に悩むことから解放されることを目指していくのであるが、それがクライアントを実存としてかつ「世界＝内＝存在」として存在するものとして規定する限り、彼ら自身が独自で固有で本来的なあり方にあるようになることは決してない、ということになってしまう。そこで本稿では Krill 自身が、クライアントにおける「存在の意味」の追究について、どのように捉えていたのか明らかにしていく。

Key Words : 実存, 「世界＝内＝存在」, 非本来性

### I. 序 論

Donald F. Krill による実存主義ソーシャルワーク (existential social work) は、「疎外 (alienation)」(Krill 1978 : 1) に悩むクライアントを援助するために展開された、ソーシャルワークの領域

---

\* 人間学部人間福祉学科

における援助枠組み（framework）である。ここでいう「疎外」とは、自らの「存在の意味」を把握することができず、自己が不安定な状態にあることである。

「私は一体何ものなのか、これから一体どうなるのか、つぎに何をしたらよいのであろうか」（Krill 1978：1）。Krillによれば「疎外」に悩むクライアントには、このような問いがみられるという。そもそも Krill は、人びとがこのように「疎外」に悩むようになったのは、帰属すべき共同体を喪失しているからであると考えた（Krill 1986：67 - 69）。かつて人びとは共同体のなかで生活しており、地縁や血縁といったきずなによって、固く守られていた。期待される役割も比較的明確であり、それを着実にこなしている限り、そのなかで無難に生きていくことが可能であった。そこではそもそも、「なぜ自らが存在するのか」などといったことについて、あえて問う必要性が生じることはなかったのである。

しかしながらその後生じた社会変動によって、人びとは共同体を失うことになっていった。そして必然的に、自らの「存在の意味」を問わざるを得なくなった。地縁や血縁といったきずなを喪失し、期待される役割も不明確となり、その存在する意味自体も次第に不明瞭となっていった。さらに自らを規制する風習や規範、宗教にもとづいた信念、慣習なども失っていったのである。

このように Krill は自らが展開した援助枠組みの焦点を、クライアントが抱える「疎外」の問題、すなわち彼ら自身が自らの存在する意味を把握することができず、自己が不安定な状態にある、ということに当てていくことになったのであり、したがってその援助枠組みは必然的に、存在論的な性格を帯びたものになっていった。なおここでいう存在論（ontology）とは、そもそも存在（あること）とは何かという根本問題を研究する学問のことであり、存在しているということの意味そのものを問うものである。彼はクライアントが、まずは「実存（existence）」として存在していることに注目したのであった。

われわれはみな、実存として「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在」（茅野 1968：93）する。われわれはつねに、自らがある（存在する）ということに自分自身を関わらせつつ存在しているのであり、いついかなる場合においても「関心の的となっているのは、この私の存在すること」（茅野 1968：93）にある。これはすなわち、自分に関心がないというあり方にあることは、原理的にはあり得ない、ということの意味している。かりにいま、自分が何もすることがなく、退屈しているとしよう。このことはごく一般的には、自身を含め何についても関心がない、というように解釈されがちであるが、実際には、何もすることがないというあり方に、自分自身を関わらせつつ存在している、ということを実に表しているのである。われわれは誰もが、自分に関わりなく存在する、すなわち自分自身に関わることから逃れて存在することは、許され得ない。さらにこのことは、他の生物や無機物には原則的にみることができない、特異なあり方である。「人間にとっては、おのれ自身の『存在』があらゆることを意味づけ、決定する究極的な根拠」（岡本 1980：56）であり、「人間がこうしたおのれの存在を憂慮し、いとおしみ、ときとして嫌悪するということは、逆にいえば、おのれ自身の『存在』

に人間がつき動かされ、翻弄されているということでもあるが、それゆえにこそ、おのれ自身の『存在』が人間にとって最大の関心事となっている」（岡本 1980：56）のである。われわれ人間にとって、自身はすでにつねに存在しているのであり、そうでないというあり方にあるということは、そもそもあり得ないのである。

Krill は、クライアントの存在を実存として捉えていったのであるが、それはすなわち彼らが、自分の存在する意味を見出すことができないというあり方に自身を関わらせつつ存在している、とみていったということになる。一方で Krill は、彼らは同時に、「世界＝内＝存在（being-in-the-world）」（Krill 1978：26）として存在していると考えた。彼ら自身は「世界から分離することができない」（Krill 1978：38）のである。クライアントを含めわれわれ人間は、たしかに実存として存在しているものの、一方で同時に「世界」のうちに<sup>あ</sup>るというあり方にある。この「世界」とは、ものごとを成立せしめる「コンテクスト」（門脇 2008：58）ともいい換えられ得るものであり、したがってそれは何らかの客体的なもの（存在者）として規定されるものではないものの、却ってそれがもの自体を「はなはだしく規定」（Heidegger=2003a：189）することになる。したがってこの「世界」は、ものの総和として捉えられ得る性質のものではない、と考えられるのである。

前述の通り Krill は、「疎外」に悩む、すなわち、自らの「存在の意味」を把握することができず、自己が不安定な状態にあるクライアントの援助を展開する援助枠組みを展開したのであった。そして彼はクライアントが、実存としてかつ「世界＝内＝存在」として、存在していると捉えていった。またこの「世界」は、ものごとを成立せしめる「コンテクスト」であると考えられるのであり、したがって彼らが「疎外」に悩むという事態も、この「世界」が規定していると考えられることになる。

ただし Martin Heidegger によれば、この「世界」は「共世界」（Heidegger = 2003a：307）として捉えられ得るものであり、「そのつどすでにつねに、私が他者たちと共に分かちあっている」（Heidegger=2003a：307）という。つまりわれわれはすでにつねに、他者とともに「世界」すなわち「コンテクスト」を共有しているのであり、換言するならば、「他者たちに隷属している」（Heidegger=2003a：327）のである。したがってわれわれは、かりに独自で固有な本来的な自己を生きていると思っていても、じつはそれは、すでに自身を取り巻く他者によって規定されている自己を生きているに過ぎないのであり、ただたんに他者に隷属しているに過ぎない、ということになるのである。「本来性（Eigentlichkeit）」とはすなわち、「自己自身の」や「自己の」「自分自身に固有な」という意味をもつのであり、「自己自身に、自分の存在、実存に明確にかかわっているというありさまを指す」（後藤 2011：42）。またこの用語は、あくまで人間における「存在論上の言葉」（後藤 2011：42）であり、「偽りでない、真実のという道徳的ニュアンスで受け取ってはならない」（後藤 2011：42）。

Krill による援助枠組みは、「疎外」に悩むクライアントがそれに悩むことから解放されることを目指すのであるが、しかしながら彼自身がクライアントを実存としてかつ「世界＝内＝

存在」として存在するものとして規定する限り、彼らが独自で固有な本来的なあり方にあるようになることは、決してないということになってしまう。はたして彼自身は、クライアントが「疎外」に悩むことから解放されるということについて、どのように考えていたのであろうか。

Krill は「疎外」に悩むクライアントが重要な他者 (significant others), すなわち家族や親せき、友人といった人びととの間につながりを回復することによって、それに悩むことから解放されるようになることを考えた (Krill 1978 : 101)。それを回復することによって、「謙遜と根づきの生活様式 (a life style of humility and rootedness)」(Krill 1978 : 78) がもたらされることになり、そしてそれは「あることについての強調された感覚 (an intensified sense of presence)」(Krill 1978 : 78) によって性格づけられるのであるという。しかしそれは、あくまで実存としてかつ「世界=内=存在」として存在するクライアントが、他者とともに「世界」を共有し合いつつ「相互共存在」(Heidegger=2003a : 316) として存在していることを強調しているだけに過ぎず、実際には「他者たちに隷属している」ことを、あえてポジティブに捉えようとしているに過ぎないのではないか。

本稿では Krill 自身が、クライアントにおける「存在の意味」の追究について、どのように捉えていたのか明らかにする。すなわち、彼自身が自らの援助枠組みを展開した際に想定していた「疎外」という事態に悩むことからの解放、つまり自らの「存在の意味」を把握することができず、自己が不安定な状態にあることから解き放たれるということが、具体的にどのような状態になることを目指していたのか、明らかにする。

## II. 「疎外」という事態についての捉え方とその対応

冒頭でも述べたように Krill における根本的な問題意識は、「疎外」という事態をどのように解決していくか、というところにあった。それはすなわち、自らの「存在の意味」を把握することができず、自己が不安定な状態にあることを意味するのであった。そしてこの「疎外」に悩むクライアントは、このような孤独で不安な状態を抜け出すために、不安定な自己を安定させようとする、という。より確固とした自己を獲得しようとすることによって、その状態を少しでも紛らそうとするのである。

Krill 自身は、このようなクライアントにおけるあり方自体を「『わたくし』に囚われた状態 (entrapment of the ego)」(Krill 1978 : 44) ということばを用いて表現している。そして彼らは、「順応すること (conformity)」、 「情熱的になること (passion)」、 「理性的であることを絶対視すること (rationalism)」、 以上3つの手段を用いることによって、不安定な自己を安定させるようになるという (Krill 1978 : 45 - 46)。

### A. 「わたくし」に囚われた状態と3つの手段

「疎外」に悩むクライアントは、「順応すること」、 「情熱的になること」、 「理性的であること

を絶対視すること」という手段を用いるのであるが、まずはじめの「順応すること」とは、「わたくし」に囚われた状態にあるクライアントが、「他者の期待により順応することで、自分自身のあり方から、さらに離れていってしまうこと」（Krill 1978：45）を意味している。つまりこのようなあり方にあるクライアントは、実存として、他者が期待する自分のあり方へ向かって自分を関わらせつつ存在しているのである。つぎに「情熱的になること」とは、この状態にあるクライアントが自己を安定させるため、何らかのものごとにも夢中になって、情熱的に取り組んでいくことを意味する。Krillによればそれは、「もっとも活気に満ちた努力」（Krill 1978：45）であるという。すなわち実存として、何らかのものごとにも囚われているというあり方へ向かって、自分を関わらせつつ存在しているのである。さらに「理性的であることを絶対視すること」とは、クライアント自身が「理性的であることそのものを高く位置づけ、かつそれを偶像化する」（Krill 1978:45）ことをいう。すなわち実存として、自らが理想的であることへ向かって、自分を関わらせつつ存在していると考えられるのである。

## B. 「世界 = 内 = 存在」

Krillによって展開された実存主義ソーシャルワークにおいては、これまで述べてきたように、「疎外」に悩むクライアントの援助を展開していく。なおその際には、クライアントが実存としてかつ「世界 = 内 = 存在」として存在することをもとに、その援助を展開していくことになる。その「世界の仕組みについて理解していく」（Krill 2011：193）ことこそが、もっとも重要となるのである。それではこの「世界 = 内 = 存在」とは、具体的には、どのような概念なのであろうか。

そもそも「世界 = 内 = 存在」という用語は、人間すなわち現存在（Dasein）における「統一的現象」（Heidegger=2003a：136）を表わしているものであり、「継ぎあわせのきく諸成分へと分解されえない」（Heidegger=2003a：136）ものの、そのことは「この機構を構成している諸構造契機が幾重ものものだということを排除しはしない」（Heidegger=2003a：136）のである。そしてHeideggerによれば、実際には、以下の観点を取り出すことができるという（Heidegger=2003a：136 - 137）。

1. 「世界の内で」。この契機と関連して、「世界」の存在論的構造を問いたずねて、世界性そのものの理念を規定するという課題が生ずる。
2. そのつど世界内存在という仕方において存在している存在者。この存在者でもって探求されるのは、われわれが「誰か？」というかたちで問いたずねるものである。現象学的証示においては、現存在の平均的日常性という様態において存在しているものは誰であるのかが、規定されるにいたるべきである。
3. 「内存在」そのもの。内ということ自身の存在論的構成が明らかにされるべきである。

このように「世界＝内＝存在」においては、これら3つの観点を取り出すことが可能である。われわれ人間はすべて、実存としてかつ「世界＝内＝存在」としてあるのであり、すでにつねに「世界」のうちにある。上記の1においては、まず、「世界」に焦点を当てている。前述の通りこの「世界」は、他者とともに共有する「共世界」として規定され得るのであり、またのちに述べるように、われわれはまさにこの「世界」において、「配慮的な気遣い」（Heidegger=2003a：174）や「顧慮的な気遣い」（Heidegger=2003a：313）といった「交渉」（Heidegger=2003a：173）によって、さまざまなものや他者に出会うことになる。つぎに2においては、「世界」のうち存在する人間すなわち現存在のあり方について、焦点を当てている。さらに3については、そのようなあり方にある人間（現存在）が「世界」とどのように関わっているのか、すなわち「内＝存在」のあり方について焦点を当てているのである。人間（現存在）は「世界」と関わる際には、すでにつねに何らかの「気分」（Heidegger=2003b：12）において、自らを発見することになる。

### C. 「世界」とは何か

われわれが実存としてかつ「世界＝内＝存在」として存在することは、「ア・プリアリに見てとられ了解されなければならない」（Heidegger = 2003a:136）のであり、われわれにとって、このように存在していること自体が、彼ら自身の経験に依存することなくそれに先立っている、ということになる。われわれは「そのつどすでにつねに、私が他者たちと共に分かちあっている」「世界」のうちで、存在しているのである。

そもそもソーシャルワークにおいては、クライアントは「環境」との間で相互に影響し合っているとみていくのであるが、その「環境」を構成する要素の1つとしてのものは、彼らがその「世界」のうちで「交渉」するときに、現れ出てくる（現象する）ことになる。Heideggerによればその「交渉」とは、すなわち、「配慮的な気遣い」と呼び得るものであるという。われわれの身の周りにあるもろもろの道具といったものは、この「気遣い」によって見いだされることになる（Heidegger = 2003a：178）。

たとえばわれわれが自宅の破損箇所を修理したいと思う、すなわち実存として、「自分自身で自宅を修理するというあり方へ向かって自分を関わらせつつ存在するとき、その「世界」からハンマーという道具が現れ出てくることになるのであり、そしてそれを実際に使用する際には、必ずしも、その詳細な仕様情報を得てからそれを用いるというわけではなく、むしろそれ自体と一体となって、さもそれが自身の身体の一部であるかのごとく使いこなすことになるのである。ただし（実際にはほとんどいないであろうが）修理にハンマーを用いることのない文化圏のひとがいた場合には、かりに身近にハンマーというものがあつたとしても、それを使うことはないであろうし、その存在（それが身近にあること）に気づくこともないであろう。道具が道具として現れ出てくるためには、その前提として、それを道具として規定するコンテクスト（すなわち、「世界」）が必要となるのである。

さらに、「環境」を構成するもう1つの要素としての他者の場合は、はたしてどうであろうか。他者については当然のことながら、人間として、自分と「同じように存在している」(Heidegger=2003a:306)。「世界」のうちにあるというあり方において、「相互共存性」として、同じように存在しているのである。またこの「世界」は「そのつどすでにつねに、私が他者たちと共に分かちあっている」「共世界」として規定し得るのであった。

たとえばわれわれは職場において、上司や同僚、部下といった他者と出会うことになるが、このこと自体はそもそも、われわれがそれらの人びととともに給料をもらいながら働く、というあり方を共有しているからこそ可能になるのであり、すなわち両者ともに「同じように存在している」からこそできることである。またともに、サラリーマンとしての「世界」を共有しているからこそ、一緒に働くということが可能になる。もしわれわれが職場において互いに「コンテクスト」を共有していなければ、自身の仕事の締切りを守ることもないであろうし、そもそも毎朝遅刻せずに定時に職場に通う、ということさえないかもしれない。新入社員が職場に慣れ、一人前に仕事ができるようになるということは、すなわち、その職場で働いている職員が共有している「世界」すなわち「コンテクスト」を他の人びとと共有することができるようになった、ということの意味している。そしてわれわれが他者と出会うことが可能になるのは、ともに「世界」を共有しつつ存在している場において、「顧慮的な気遣い」という「交渉」によると考えられるのである。

#### D. ソーシャルワーク専門職による介入

前述の通り「疎外」に悩むクライアントは、「わたくし」に囚われた状態にある、と考えられるのであった。具体的には「順応すること」、「情熱的になること」、「理性的であることを絶対視すること」、以上3つの手段を用いることによって、不安定な自己を安定させようとするのである。そして彼らは、この状態を脱することができたとき、彼らにとっての重要な他者との間に、つながりを構築することが初めて可能になるのであり、それによって、「疎外」に悩むことから解放され得るのである。

そもそもクライアント自身は、実存として「自分の存在することへ向かって自分を関与させつつ存在」するのであり、同時に「世界=内=存在」として、「世界」のうちにあるのであった。そしてこの「世界」は、ものや他者といった存在者が現象する場として捉えられ得る。クライアントは先の3つの手段を用いることによって、不安定な自己を安定させようとするが、そもそもそのようなこと自体が可能になるのは、彼ら自身におけるそのようなあり方についての了解、すなわち自己了解を可能にする「世界」のうちにあるからである。つまり彼らは、そのような「コンテクスト」のうちにあるのであり、換言するならば、そのようなあり方にあることを強いる「コンテクスト」のうち存在していると考えられるのである。したがって、彼らが重要な他者との間に改めてつながりを構築していくためには、彼ら自身が「わたくし」に囚われた状態にあることを強いる「世界(コンテクスト)」のうちにあるということ自体を変えて

いくことが求められてくる。さらに彼ら自身が、その重要な他者とのつながりを重んじる「世界(コンテキスト)」において存在することができるようになる必要があるのである。

Krill による実存主義ソーシャルワークにおいては、とりわけ「対話」(Krill 2011: 186) を重んじた援助を展開していくことになる。つまり彼自身の援助枠組みにおいては、クライアントとの「対話」こそが、まさに重要な鍵となってくるのである。ソーシャルワーク専門職との「対話」が、彼ら自身が「わたくし」に囚われた状態にあること、すなわちそのようにあることを強制する「世界(コンテキスト)」のうちに存在すること自体に、変更を迫ることになる。「世界」はあくまで、「そのつどすでにつねに、私が他者たちと共に分かちあっている」「共世界」として規定し得るものであり、したがってそれを分かち合っている他者の構成が変わるならば、必然的に、そのあり方自体も変更が生じざるを得なくなってくる。つまり、他者とのつながりを重んじるソーシャルワーク専門職自身が、クライアントとの「対話」を通じて、彼ら自身とともに「世界」を共有するようになることによって、彼らが「わたくし」に囚われた状態にあること、すなわちそのようにあることを強いる「世界(コンテキスト)」のうちに存在することから、他者とのつながりを重んじるそのうちに存在することができるようになっていく、と考えられるのである。

Krill による実存主義ソーシャルワークは、クライアントが実存としてかつ「世界=内=存在」として存在することに焦点を当てた援助枠組みである。ソーシャルワーク専門職が彼ら自身と「対話」することを通じて、クライアントの「世界」のあり方そのものを変更していくことによって、彼らが「疎外」に悩むことから解放されるようになることを目指していく。「介入(インターベンション)」することによって、クライアントにおけるそのあり方自体を変えていこうとするのである。

しかしながらクライアントは、ソーシャルワーク専門職と「対話」することによって、たしかに「疎外」に悩むことから解放されはするものの、いまだに、ソーシャルワーク専門職や重要な他者といった他者とともに「世界」を共有しつつ存在しているのであり、依然として「他者たちに隷属している」に過ぎない。したがってそれに悩むことから解放されたとはいっても、実際には「自己自身に、自分の存在、実存に明確にかかわっているというありさまを指す」「本来性」を獲得できたわけでは、必ずしもないのである。

### III. Krill における「疎外」の問題の解決とその限界

Krill はそもそも、「疎外」に悩むクライアントの援助のあり方を追究してきたのであった。そして彼らがこの問題から解放されるには、重要な他者とのつながりを回復していく必要があると考えたのであった。「わたくし」に囚われた状態にあるという、いわば自己本位的なあり方にあることから抜け出し、彼ら自身がその重要な他者とのつながりを重んじるあり方に、あ

くまでア・プリアリにコミットしていくことが求められるのである。

ただし Krill 自身は、クライアントが家族や親せき、友人といった重要な他者とのつながりを形成していくことを重視しているのであり、それらの人びとと意味のある関係性を構築することによって、「生きていく過程が活性化される (life process is vitalized)」（Krill 1978 : 107）と考えている。しかしながらここで改めて検討すべきは、この場合にはたして、彼ら自身の「存在の意味」が明らかになるのであろうか、ということである。

#### A. 人間（現存在）における日常的なあり方

Heidegger によれば人間すなわち現存在は、ごく日常的には非本来的なあり方にあり、いわば「世入」（Heidegger=2003a:327）として存在している。これはすなわち、われわれ人間が「相互共存在」として「他者たちに隷属している」ということである。つまり他者たちの意向が、われわれ自身の本来的なあり方を奪取してしまっているのである。したがってかりに、自身の固有のあり方を生きていると考えていても、実際には、すでに自身を取り巻く他者によって規定されている自己を生きているに過ぎないのである。

人間（現存在）はたしかに、実存として「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在」するのであり、同時に「世界＝内＝存在」として、他者とともに「共世界」のうちで、そのようなあり方にあることを強いる「コンテキスト」のうち存在している。先に挙げたサラリーマンの場合、自分自身がどれだけ个性的に、すなわちより本来的なあり方において働いていると思っけていても、実際には他の上司や同僚、部下といった他者と共有している「世界（コンテキスト）」のもとそのようにあるのであり、したがって彼自身のあり方自体は、実際には、すでにつねに彼ら自身が属している職場文化において共有されている「前理論的に暗黙のうちに伝えられ、受け入れられてきた多くの約束事やふるまいの型」（門脇 2008 : 56）に拘束されているに過ぎないのである。

Krill は「疎外」に悩む、すなわち自らの「存在の意味」を把握することができず、自己が不安定な人びとは、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて生じた「社会変動」によって生じたと考えた（Krill 1986 : 67 - 69）。そのような人びとが生じてしまうのは、「帰属すべき共同体を喪失しているから」であると考えていたのである。かつてそこでは「期待される役割も比較的明確であり、それを着実にこなしている限り、そのなかで無難に生きていくことが可能」であり、そこではそもそも「なぜ自らが存在するのか」などといったことについて、あえて問う必要性が生じることはなかった。すなわち、そのような存在論的な問いが生じる余地は、無かったと考えられるのである。

しかしながらその後生じた「社会変動」によって、人びとは共同体を失うことになっていったのであり、必然的に、自らの「存在の意味」を問わざるを得なくなっていった。そして自らの不安定な自己を安定させるため、「わたくし」に囚われた状態、すなわち「順応すること」、「情熱的になること」、「理性的であることを絶対視すること」という、3つの手段を用いるように

なっていた。ただしこの場合においても、当然のことながら、人びとは実存としてさらに「世界＝内＝存在」として存在しているのであり、そのような3つの手段を用いるという自身のあり方の了解、すなわち自己了解を成立せしめる「世界(コンテキスト)」のうちにある。つまり彼らの背景には、そのようなあり方にあることを強いる「約束事やふるまいの型」があると考えられるのであり、日常的に非本来的なあり方にある「世人」として存在しているのである。

## B. Krill による援助枠組みにおける限界

Krill はそもそも、「疎外」に悩むクライアントの援助のあり方を追究してきたのであった。そして彼らがこの問題から解放されるには、重要な他者とのつながりを回復していく必要があると考えた。「わたくし」に囚われた状態にあるという、いわば自己本位的なあり方にあることから抜け出し、彼ら自身がその重要な他者とのつながりを重んじるあり方に、あくまでア・プリオリにコミットしていくことが求められるのである。

ただし Krill 自身は、クライアントが家族や親せき、友人といった重要な他者とつながりを形成していくことを重視しているのであり、それらの人びとと意味のある関係性を構築することによって、「生きていく過程が活性化される」ようになる。しかしながらこの場合、はたして彼ら自身の「存在の意味」が明らかになるのであろうか。

クライアントが重要な他者とのつながりをもとに生きるということは、すなわち、彼ら自身がそれらの人びととの間で共有されている「世界(コンテキスト)」のもとに生活を送っていく、ということの意味している。それはつまり、共有化された「約束事やふるまいの型」にしたがって生きていくということであり、先に挙げた「社会変動」以前のように、「なぜ自らが存在するのか」などといった存在論的な問いが生じる余地が無い状態を再現しようとする、に他ならない。したがって Krill による「疎外」の問題の解決は、クライアントが自らの「存在の意味」を把握することによってそのものから解放されることを目指すのではなく、むしろ、旧来の人びとのあり方を再構築しようとするものとして規定されることになる。

そもそも「世界(コンテキスト)」は、現存在として人間が、「いま－ここ」に存在するからこそ、開示され得る。現存在における「現(Da)」とはすなわち、「世界」が開示される起点である。このように「世界」はこの「現」において開示されるのであるが、それと同時に「内＝存在」をも明らかにする。つまり現存在における「現」には、「おのれ自身が明るみ」(Heidegger=2003b:8)であることが表されているのであり、そしてそれこそが「世界」と「内＝存在」を開示するのである。この「内＝存在」は、現存在における「現」の本質を取り出すことによって、分析することが可能になる。実際のところ「情状性(Befindlichkeit)」、「了解(Verstehen)」、そして「語り(Rede)」という3つの本質を取り出すことが可能である。つまりこの「内＝存在」は、これらの本質によって成り立っているのである。

まず「情状性」についてであるが、これは現存在が「最も熟知で最も日常的なもの、つまり、気分とか、気分的に規定されていること」(Heidegger=2003b:12)を述べたものである。現存

在としての人間は、この「情状性」において自身を発見するのであり、気分的に規定されたものとして、すでにつねに自らを見いだしてしまっているのである。

現存在は自分自身を、すでにつねに気分的に規定された情状のうちにあるものとして見いだしているのであるが、それはすなわち自ずと「了解」が生じているということであり、したがって「了解」は「情状性」と「等根源的」(Heidegger=2003b: 32)であるといえることになる。またこの「了解」は、現存在が自らの存在(あること)を、諸可能性にめがけて企投(Entwurf)する契機となる。またこの「了解」の完成は、「解釈」(Heidegger=2003b: 47)と表現し得るものとなり、さらにこの「解釈」の派生的様態として「陳述」(Heidegger=2003b: 61)を挙げることができる。「陳述」とはつまり、「解釈」されたことを他者に提示し、さらにそれを他者に提示し伝達することによって、「共に見えるようにさせる」(Heidegger=2003b: 64)。また現存在は、自身をすでに気分的に規定されたものとして「情状性」において見いだしている、すなわち「了解」しているのであったが、この「了解」自体はあくまで現存在が自ら語ることによっておこなわれるのであり、したがって「語り」は、「情状性」と「了解」とともに「等根源的」(Heidegger=2003b: 78)なものとして位置づけられ得ることになる。

先にも述べたように人間すなわち現存在は、ごく日常的には非本来的なあり方にあり、「世入」として存在している。このことは現存在が「相互共存在」として、「他者たちに隷属している」ということを表しているのであり、「他者たちの意向が、われわれ自身の本来的なあり方を奪取してしまっている」。Krillによる援助枠組みにおいては、クライアントが他者とのつながりを形成していくことを、もっとも重んじていた。そしてそれはすなわち、共有化された「約束事やふるまいの型」にしたがって生きていくことを目指すのであり、「社会変動」以前のように、「なぜ自らが存在するのか」などといった存在論的な問いの生じる余地が無い状態を再現しようとするのであった。結果としてクライアントは、たしかに「疎外」に悩む、すなわち自らの「存在の意味」を把握することができず、自己が不安定な状態にあることから抜け出すことができるようになるのかもしれないが、一方では彼らはいまだ日常的に非本来的なあり方にあり、「世入」として存在し続けるのである。Krillによれば、クライアントは自分自身を、「恐れや願望(fear and desire)」(Krill 1978:101)といった気分において見いだすという。そしてここに、この援助枠組み自体がもつ「限界」がある。

### C. Heideggerによる現存在の本来的なあり方の提示とその矛盾

これまで述べてきたようにKrillにおける援助枠組みにおいては、たしかにクライアントにおける「疎外」という事態に焦点を当てていったのであったが、実際にはその「存在の意味」を明らかにするという、根本的解決にはいまだいたっていない、と考えられるのであった。それではたして人間(現存在)は、そもそも、自らの「存在の意味」を明らかにすることは可能なのであろうか。またそれはすなわち、クライアントが自らの本来的なあり方において、生きていくことができるということを意味する。

Krill が自らの援助枠組みの基盤に据えた「世界＝内＝存在」という概念を提示した Heidegger は、人間すなわち現存在の根本情状性として「不安」(Heidegger=2003b:132)を挙げている。日常的で非本来的なあり方において、彼らは他者とともに「相互共存在」として存在しているのであり、「他者たちに隷属している」と考えられるのであった。つまり、本当の自分ではないことへと逃避している、すなわち「頹落 (Verfallen)」(Heidegger=2003b:112)した状態に陥っていると考えられるのである。現存在の根本情状性としての「不安」は、決して、何ら特定の対象をもってはいない。この点については、ある具体的な対象をもつ「恐れ」とは、まったく異なっているのである。

この「不安」の対象としては、それは無であって、どこにもない。この根本的な情状性としての「不安」においては、これまで述べてきた「配慮的な気遣い」や「顧慮的な気遣い」において見いだされることになったものや他者は、その重要性を失う。さらに現存在が存在するという事態そのものに、そもそも初めから何ら根拠がない(なかった)ことが明白となる。日常的で非本来的なあり方において、われわれは、いわば「頹落」した状態にあり、自らが見いだしたものや他者にとらわれつつ存在している。しかしこの「不安」においては、われわれ自身の存在の無根拠性が暴露されることになり、そしてこのときわれわれは、いかなるものや他者においても、とらわれることができなくなってしまふ。われわれはこの「不安」によって、日常的で非本来的な「頹落」に陥った状態から抜け出し、本来的なあり方にあることが可能になり得るのである。

Heidegger は「不安」という根本情状性にあり、それとともにこの情状性を「了解」し、さらにもっとも固有の可能性に企投するところに、現存在の「本来的なあり方」があると論じている。ただし彼は後年、現存在におけるこの「本来的なあり方」という概念を棄却している。そして、「非本来性の一元論によって現存在の存在を解釈しなおそう」(仲原 2008:324)とした。これはすなわち、現存在が日常的で非本来的なあり方から本来的なそれへと移行し得るという考えを自ら捨てた、ということの意味する。なおそのような事態が生じたのは、そもそも、Heidegger 自身による「頹落」のとらえ方に不備があったからである。仲原孝によれば「頹落」には、そもそも現存在における「本質構造」(仲原 2008:153)が備わっており、したがってそれを「現存在から除去しようとすることは不可能」(仲原 2008:153)であるという。「頹落」とはすなわち、「最も身近なものとの関わりへの没入」(仲原 2008:155)をも意味するのであり、現存在が実存として存在している限り、それはすでにつねに必然的に周囲のものや他者と密接に関わらざるを得ないのである。現存在はすでにつねに「頹落」した状態にあるのであり、このあり方そのものを変えることはできない。そしてここに、Heidegger 自身の思想形成における矛盾があると考えられるのである。

Krill は、クライアントが他者とのつながりを形成していくことによって、「なぜ自らが存在するのか」などといった、いわば存在論的な問いの生じる余地がない状態を再現しようとする

援助枠組みを展開した。たしかにそれによって、彼らは自らの「存在する意味」を把握することができず、自己が不安定な状態にあることから抜け出すことができるようになるのかもしれないが、しかしその一方で、彼ら自身は、いまだ日常的で非本来的な状態にある。そしてここに、彼自身による援助枠組みの限界性があると考えられることになる。一方で Heidegger 自身も、後年、「非本来性の一元論によって現存在の存在を解釈しなおそう」としていた。われわれ人間にとって、その「存在の意味」を明らかにすることは、決して容易ではないのである。

#### IV. 結 論

Krill による実存主義ソーシャルワークは、クライアントを実存としてかつ「世界＝内＝存在」として捉えていくのであり、「疎外」、すなわち自らの「存在の意味」を把握することができず、自己が不安定な状態にあることに悩むクライアントが、「社会変動」以前のように、他者とのつながりのなかで共有化された「約束事やふるまいの型」にしたがって生きていくことができるようになることを目指していく。それによって彼ら自身に、「なぜ自らが存在するのか」などといった、存在論的な問いが生じる余地が無い状態を再現していこうとするのである。つまり Krill による「疎外」の問題への対応は、クライアントが自らの「存在の意味」を把握することによってそれに悩むことから解放されることを目指す、すなわちその本来性を獲得することを目指すのではなく、むしろ旧来の人びとのあり方を再構築しようとすることによって、それに悩むことから解放しようとすることになる。またここに、その「限界」が存在すると考えられるのであるが、一方で Heidegger 自身も後年、現存在における「本来性」という概念そのものを棄却していた。したがって Krill による援助枠組みにも、一定の妥当性があると考えられることになる。

Krill においては、クライアントが自らの非本来性を抱えつつも、重要な他者を始めとする他者とのつながりのなかで、共有化された「約束事」や「ふるまい」をいかに全うしていくのか、が問われることになる。そしてここに、彼自身によって展開された援助枠組みの特徴がある。

Krill による実存主義ソーシャルワークは、その本来的な目的であるクライアントにおける「存在の意味」を明らかにできていないということで、援助枠組みとして不十分であるともいえる。しかし先にも述べたように、そもそもその意味自体は、人間にとって容易には把握し得ないものである。ソーシャルワーク専門職がクライアントとともに、彼ら自身の「存在の意味」を希求しつつも、実際にはそれが叶わない境遇のなかで、少しでもよりよい状態を増進しようとするところに、その援助枠組みの要諦があると考えられるのである。

ソーシャルワークの実践においてソーシャルワーク専門職は、プロフェッショナルとして、それを計画通りに展開していくことが求められるものの、ソーシャルワーク専門職がその結果（アウトカム）自体を統制（コントロール）することはできない。それはそもそも、有限な存在者としての人間には、なし得ないことなのである。したがってソーシャルワーク専門職はク

クライアントとともに、その本来的なあり方については未知のまま、あくまで対等な立場に留まりつつ、その実践を展開していくことになる。それはすなわち、ソーシャルワーク専門職がクライアントに対する指導的な立場を、あらかじめ放棄するということを意味している。つまり援助を提供する側が、何がもっとも良く、機能的で、成熟しているのかについて知っている、という立場をとらない (Krill 1978: 135) のである。

Heidegger は、「不安」こそが、人間が日常的で非本来的な「頹落」に陥った状態から抜け出し、本来的なあり方にあることを可能にすると考えたが、そのためには、自らのもっとも固有な可能性としての「死」へと先駆することが必要であると規定した。先にも述べたように彼は、のちにこの本来性についての考えを捨てたのであったが、しかしながらその後も、人間にとっての「死」について引き続き重視し続けた。そしてそれは、人間と自然の相互性を考察する際に、重要な役割を果たすことになる。「人間は自然に抗して、言葉や知性を発見し、国家を造り、建設的な技倆を体得したとしても、『ただひとつの衝撃である死を逃れるすべだけは見出すことができない』」(村井 2011: 366) のであり、「人間にとって『死』が現前する場面において、自然と人間の相互性が破られ、自然に対する人間の脆弱さが示されるとともに、その脆弱さゆえに自然とのさらに根源的な関わりが開かれる」(村井 2011: 366) のである。「老い」やその先にある「死」は、われわれが、いかに現世的に成功しかつ磐石の地位を築いていようとも、いつか必ず訪れるものであり、それがいかに役に立たないかについて、われわれは嫌でも思い知らされることになる。

Krill が「疎外」について説明する際に、中年期以降の人間にみられる、以下のような例を提示している。それはすなわち「社会的に成功し、良好な人間関係を保ち、自己理解を深め、高貴な目標をももちあわせているというのに、なぜ私はこのように孤独で、充実感がなく、退屈で、不安なのであろうか」(Krill 1978: 1) というものである。これこそがまさに「死」および「老い」が契機となって、自身の脆弱さを露呈しつつある端的な例であるといえよう。

われわれ人間は、いかに精神的にかつ経済的に力 (パワー) を得ようとも、自らの「死」や「老い」に対しては、まったくの無力である。本稿で明らかにしてきたように、Krill による援助枠組みは、「疎外」に悩むクライアントにおいて、「なぜ自らが存在するのか」などといった存在論的な問いが生じる余地が無い状態を再現していこうとするのであるが、しかしそれは、クライアントのみならずわれわれの誰もがいずれは直面するであろう「死」や「老い」、またそれらから生じる不安について、考慮していないというわけでは決してない。むしろわれわれがそれらについて、ひとり単独では直視できないからこそ、他者とのつながりの重要性をあえて強調しているのである。帰属すべき共同体を喪失し、他者と分かち合い得る物語をも失ったアトム化した個人にとって、自らの「死」や「老い」は、直視し難いものである。本質的に、本来的なあり方にあることが叶わないわれわれは、他者とのつながりという礎を頼りに、いずれ直面するであろう「死」や「老い」から醸し出される「不安」に脅かされつつも、与えられた生を、できうる限り自分らしく全うしようとする他ない。

Heidegger は後年、人間は本来のあり方にはあり得ない、すなわち「存在の意味」を把握することができないと考えるようになっていったが、渡邊二郎によればその哲学とは「拒まれ、拒絶され、突き離され、＜存在に見捨てられたありさま＞という遺棄の境涯のうちに、絶望せず、むしろ、贈与を予感して、そのことのうちに、『惹きつけ魅惑するような - 突き動かし』を読み取ろうとする」（渡邊 2008：289）ものであるという。われわれに必要なのは、Krill がいうように、他者とのつながりをもとに非本来のあり方にもとづきつつも、さらに、自らがすでにつねに存在すること自体に、その意味を感じ取っていくことではないであろうか。

#### 引用文献

後藤嘉也（2011）『ハイデガー「存在と時間」』晃洋書房。

Heidegger, M. (1927) *Sein und Zeit*, Max Niemeyer. (= 2003a, 原佑・渡邊二郎 訳『存在と時間Ⅰ』中央公論新社, 2003b, 原佑・渡邊二郎 訳『存在と時間Ⅱ』中央公論新社, 2003c, 原佑・渡邊二郎 訳『存在と時間Ⅲ』中央公論新社.)

門脇俊介（2008）『「存在と時間」の哲学Ⅰ』産業図書。

茅野良男（1968）『実存主義入門』講談社。

Krill, D. (1978) *Existential Social Work*, The Free Press.

\_\_\_\_\_ (1986) *The Beat Worker*, University Press of America.

\_\_\_\_\_ (2011) Existential Social work, Turner, F. ed., *Social Work Treatment*, 5<sup>th</sup> ed., Oxford Univ. Press, pp.179-204.

村井則夫（2011）「ハイデガーと前ソクラテス期の哲学者たち」神崎繁・熊野純彦・鈴木泉（編）『西洋哲学史Ⅰ：「ある」の衝撃からはじまる』講談社, pp. 349-388.

仲原孝（2008）『ハイデガーの根本洞察 - 「時間と存在」の挫折と超克』昭和堂。

岡本宏正（1980）「現存在の予備的な基礎的分析（その1）」渡辺二郎（編）『ハイデガー「存在と時間」入門』有斐閣, pp.53 - 93.

渡邊二郎（2008）『ハイデッガーの「第二の主著」』『哲学への寄与試論集』研究覚え書き：その言語的表現の理解のために』理想社。

（2013.9.14 受稿, 2013.10.16 受理）